九州集会／第５分科会

会社倒産から自主経営への道

小林千里
（新潮印刷）

印刷産業の実態

2000年の工業統計では印刷産業の事業所は40,083社で、従業者は428,309人ということですが、10年前に比べると事業所は10%、従業者は13%減少しています。

印刷産業の技術革新が目まぐるしい中で、すでに福岡県の印刷機材の設置率は需要に比べ、きわめて高く、仕事の奪いあいはすでに長期化してきていました。長引く不況でさらにダンピングが進み経営が益々悪化しています。官公需も底がなく、入札の度に単価が引き下げられる状態で印刷産業とそこで働く労働者の雇用不安に拍車がかかっています。

官公需は減っているものの、年度代わりなどの需要期には最低限に減らされた労働者が犠牲で、仕事があるほうが良いからと、むちゃくちゃな仕事をやらされ、人間らしく生きる権利を益々奪われています。

先月10月にも年商14億といわれていた福岡の栄光印刷が倒産しました。また、印刷機材の大手である千代田マシナリーも10月倒産しました。

隆文堂印刷の倒産から自主再建への道

印刷産業のダンピング競争の中、隆文堂印刷は他の様々な要因も加わり、平成８年に倒産しました。当時隆文堂印刷には132人が働いていましたが、私たちの全印総連の労働組合の他に２つの労働組合がありました。１つは１人組合員でしたが、もう１つは全印総連の組合員の倍以上の組合員がいる組合があり、それに組合に入っていない人もいました。倒産してから労働債権の交渉には統一交渉をすることになりましたが、私たちは労働債権の確保と経営再建を掲げていたのできわめて難しい交渉でした。こうした厳しい中で再就職の道を選ぶ人も出て来て、経営再建に参加しようとする人は10人程度になりました。それでも私たちの組合はみんなで使い慣れた機械の選定をし、再建への追求をしました。

会社は破産の道をえらび、破産管財人から本社にある機械を一括して購入する業者がいることを知り、機械が売れてしまっては仕事を続ける道を閉ざされる事になり、10人が食べていく生産力に必要な機械を選定し破産管財人、機械購入業者と交渉し200万円を準備して機械を購入しました。

初め７階建ての隆文堂印刷の本社ビルで経営再開を計画していましたが、大きすぎる事もあり、今のレトロ地域にあった活版工場が10人働くのに適当だとし、機械を活版工場に移転させ、会社設立準備をしていましたが、破産管財人からこの地域はレトロとして北九州市が購入するといわれ、本社ビルならしばらく売れることはないだろうということで再度本社ビルに機械と一緒に戻り、退職金を出し合って関門海峡の見える隆文堂印刷から新しい潮の流れをつくろうと有限会社新潮印刷として設立しました。

設立に参加しない人も出資してくれた組合員もいます。もちろん、労働債権の中間配当、最終配当には全組合員の他に非組合員の分も含めた交渉のための活動は引き受けてのことでした。

10人が食べる道は製本に重点を

印刷業者はたくさんありますが製本業者は少ないこともあり、隆文堂印刷の経験を生かし、使い慣れた折機をつかって紙加工や製本に重点をおくことにし、宣伝に印刷所を回りました。隆文堂で営業していた人は得意先を持っていたこともあり、再就職が早く決まった人が多く、その人たちから倒産まで隆文堂印刷でしていた仕事を持ち込まれるようになり、少し先が読めるようになりました。

しかし、10人が食べていくには大変でした。手形を割りにいくと50万円代表者として個人の預金がされると割り引いてもよいなど。また銀行の貸し渋りが横行している時でもあり、国民金融公庫に借りにいくと隆文堂の本社ビルという所ではお金は貸せないと断られ、応援もえて再交渉しどうにか借りる事が出来ました。

なんとか困難をクリアーしている中で会社設立から１年３カ月たった10月末、破産管財人からこの場所が売れたと通知を受け、一瞬お先真っ暗と言う思いでした。黙ってはいられない、早速、福岡の購入先や弁護士事務所まで交渉に行きましたが、翌年３月まで待つと強固な構えでした。

一方、会社の方は雨漏り、壁の崩れ、汚水管のつまりなど困難を極めていたこともあり、ここで続けて行く事も困難だろうと判断し、移転することにしました。北九州市に再度場所探しの交渉したりしました。私たち自身も場所探しをはじめた矢先、12月で製本業をやめ、土地、建物を売り出されていることを知りました。早速見学し、工場の作り、小倉に近い場所であり、製本設備が完備されていて、大変好都合な所でした。しかし3,000万円などお金があるわけではありません。また、北九州中小企業振興課と交渉し購入代金3,000万円を借り入れ、現在の門司区松原に三度目の移転をし、経営続行ができることになり現在にいたっています。

3,000万円の償還は７年ということでしたが、前の製本業者の得意先も譲り受けることでなんとか支払えるという見通しもつけていましたが、景気の回復どころか次第に悪くなる一方で、予測された受注に届かず、資金繰りは厳しくなり、早速北九州市に支払い額の変更などを要請しました。さきざき不利益を講じるといわれながらも２年間延長し、なんとかもちこたえています。

売上も伸び、昨年やっと黒字に転換しました。しかし、賃金がやすいこと、減価償却もやれていないので実際には黒字とはいえない、と銀行からも指摘されましたが、それでも売上が伸びていることから昨年の年末には借り入れることができ、取り敢えず安心して正月を迎えることができました。

認識の一致、心一つにをモットーに

営業は印刷業の厳しさ、世間の厳しさを身にしみて感じることが出来ますが、工場労働者はそうはいきません。少しでも気持ちが緩むとまたも倒産の道を辿ることになります。なによりも認識の一致、心を一つにすることが大切です。毎日朝礼をし、作業工程はもとより、印刷業界の事、他産業のこと、暮らしを厳しくしている張本人である政治の事なども心掛けて話すようにしています。得意先や様々な人が出入りされますが、仕事に向かう姿勢、目のいろが違うとほめられることがよくあります。なんといっても認識の一致、心一つがなによりの財産だと心掛けています。

新たな受注確保の道を探求

今年偶然ではありましたが若いすばらしいデザイナーを迎え入れることができました。また、事務職に１人迎え入れました。出費が多くなるからと踏み切れなかったインターネットも開始しようとしています。単なる価格競争でなく、安心してまかされる印刷所めざし、また本作り20年間の経験を生かし、文字入力から上製本まで喜ばれる経営を確立し、販路を広めたいと思っています。

千葉集会／第４分科会／

高齢者の仕事おこしと社会参加

高橋　巌

（農協共済総合研究所）

現在農村部では，他に類例のないスピードで高齢化が進行している。こうした農村部にあっては，高齢者が地域農業の担い手となっている地域も多いが，それは従来，否定的に捉えられてきた。そこに中心的にあるのは，高齢者を，若年層と対比して「弱く，自立できない」存在であると見なし，経済行為の担い手たりえないとする考え方なのではないか。あるいは，生産性を高めるため，高齢者はなるべく早く農業をリタイアし，生産性の高い若年層に経営を集約するという「構造政策」上，それを「阻害する者」が「滞留」するが如く扱うといった，高齢者の役割を過小評価する論調にあったのではないだろうか。

しかし実態として，高齢者は地域農業において極めて重要な位置にある。もとより，高齢者のうち約９割は，介護等が不要な「元気な高齢者」であり，そして農村部では，そうした高齢者たちが，高齢者営農をはじめとする多様な活動を通じて，地域農業の維持に貢献しているのである。

すでに筆者は，拙著＊）でこのような高齢者の役割に光を当て，その実態と重要性を詳細に分析するとともに，こうした高齢者が活躍する場づくりが重要であること，そして，それによって，今後とも，定年帰農等によりその再生産が可能であることを体系的に明らかにしたが，本報告ではそれに基